ŌMIYA NEWS
No.069　2026年10月31日　JR東労組大宮地本



最近、ＪＲ東日本は『お身体の不自由なお客さまの社会参加や高齢化社会の進むなかで、今後もさらに高いレベルでハード・ソフトの両面から鉄道の利便性、快適性の実現に取り組んでまいります』と会社の考えや姿勢を明らかにしている。これは企業と利用者が互いにより良い共存関係を目指す理想である。しかし現実には、その理想と社会の実態との間に大きな隔たりがあるのではないか。本当に現在の社会は、市民や労働者、とりわけ社会的弱者にとって生きやすい環境となっているのかが問われている。

その問題意識がより深まったきっかけが、秋田地本主催の「旅のプレゼント」への参加だった。この取り組みは、身体的・精神的な障がいを持ち、普段はなかなか旅行に出かけられない子どもたちに、電車の旅を楽しんでもらうというものだ。同時に、社会の現実に目を向け、誰もが平等に、人間らしく生きられる社会をめざすというヒューマニズムの精神を、労働組合が実践的に示した取り組みでもある。

参加した子どもたちからは「楽しかった。またやってほしい」という声が寄せられた。そして運営側として関わった参加者からは「最初は緊張していた子供たちも、サッカーやクイズで打ち解け、次第に笑顔になってはしゃいでいた姿は嬉しかった」「準備は大変だったけれど、裏方を体験できて勉強になった」「多くの人にこういう機会を通じて体験してほしい」と語られた。互いに支え合い、手を取り合って生きていくことの大切さを、誰もが実感できる時間となった。人が人らしく生きるためには、社会の理想と現実の差を知り、相手の立場を理解し、信頼し、向き合う姿勢が欠かせない。広い視野で物事を見ることが求められる。

しかし一方で、身近な職場実態に目を向けると、年次有給休暇が取りづらい、休日出勤が多い、ハラスメントや不当労働行為が見過ごされるなど、さまざまな問題がある。こうした状況は、会社で働く人への「理想」を壊し、ゆがんだ「現実」が社員の愛着やモチベーション、そして信頼を奪ってしまう。人への愛着が失われた職場では、本当の意味での安全や、心のこもったサービスは成り立たない――私は強くそう感じる。

だからこそ私たちは改めて、「何を守り、何と向き合うのか」という意志を持ち、不条理に抗う「抵抗とヒューマニズム」の精神を貫くことが大切だ。本当に誰もが暮らしやすい社会にできるのは、人を思う気持ちと、献身性である。そのために労働組合が社会の基礎を築く主体として堂々と行動し、労働者・市民が輝ける世の中にしたい。

「旅のプレゼント」は、単に旅を贈るだけの取り組みではない。参加した人の心に、大きな、大きな未来への財産を残す取り組みと考える。その実践は信頼し合える社会を築くための原動力になると考え、仲間と共に歩んでいく。

（Ｕ・Ｔ）



社会の現実を直視し、「抵抗とヒューマニズム」の精神で、人間の尊厳を守り、誰もが安心して生活できる社会を私たちの実践で実現しよう！